●朝の NGO ミーティング

この日の朝のミーティングは、プレナリーが 9 時から開始されるというので、8 時に開始するというメールが流れたが、いつもミーティングをする食堂は空いていないし、WWN のメンバーをどこにも誰も見つけることができず、結局早起きしただけになってしまった。

● USB の忘れ物をとりに街へ再び

サイドイベントのプログラムの折り作業に夢中になってしまって、コンピュータに差し込んだ USB メモリを忘れてしまったので、再び隣り街のコピー屋さんへ行かなければならなかった。何度もコピーで通って、顔を覚えてもらっていたので、忘れものの受け渡しは直ぐに終わった。本当にお世話になりました。

●プレナリー閉会

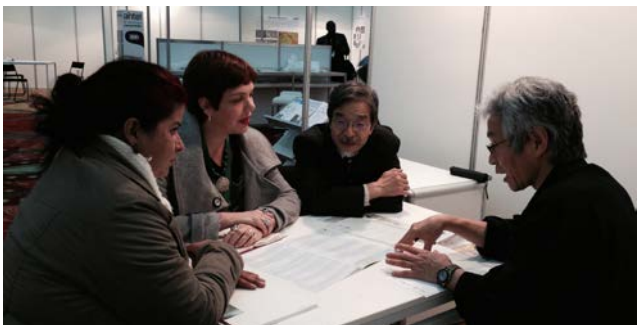
プレナリーセッションをフォローすることは、ほとんどできなかったが、代表団および条約事務局の過酷な作業は容易に察しがついた。決議案（DR）を正面スクリーンに投影しながら、少しずつ画面を送りながら読み確認していく作業には、参加者全員が疲労の色を隠せず、最後の DR の確認が終わり、新しい戦略計画も承認されて全ての工程が終了すると、皆の安堵で空気が軽くなった。

●クロージング・ステートメント

最後まで検討して作成した NGO からのクロージング・ステートメントは、南アメリカを代表して、ブラジルのラファエラ・ニコラさんが発表した。

●ブラジルのラファエラさんとの打ち合わせ

会議が終了した後、撤収し終わった後のブースでブラジルのラファエラさん、アウリアさんと水田決議の取り組み拡大についての打ち合わせをした。



ブラジルの稲作農業は多国籍企業による大規模な工業化が進んでおり、そこに農家さん（人）影を見ることはできないという。土地オーナーが強大な力を持ち、違法な灌漑用水の引き込みによって川の水位が下がり、違法な農薬の使用も賄賂を支払って見逃してもらうといった癒着がはびこっている。こうした持続不可能な大規模な農業に対して、現場で責任をとる人は見えてこない。調べようにも、空から機械が行き来するだけで、手がかりも見えてこない。

一方、小規模で高価格なグルメ市場向けに、粒が小さくて黒い昔からこの土地で育ててきた品種の米を有機栽培する農家がブラジルの南部の方（ボリビアとの国境近く Banhados do Tain）にある。こうした古代有機米（Endemic Rice）は、現在は都市部の金持ち層向けの店でしか入手することができない。

もし、水田決議の実現のためにモデル的なケースを考えるのであれば、唯一農家の顔が見える、この南部の農家から着手するのがよいと考えている。

ここで柏木さんが韓国の例を紹介して、有機米の生産者と生協とが連携して、生産者と消費者を結びつけることで、安全安心な米の供給と農家の収入安定の win-win を推進した韓国での事例を紹介した。

ブラジルでも、お米の委員会（Council）が組織されており、そこでは民主的な方法によって灌漑用水の管理運営などを行っている。そこに相談してみることから始めるのがよいかもしれない。日本のように何百年も前から水田が存在していた訳ではないので、今のブラジルでは、そもそも水田耕作をすること自体が環境破壊と生物多様性を損なう原因であるということを知ってほしい。

●夜のカクテルパーティ

最終日の夜は、全員が参加できるカクテルパーティが開催された。一仕事を終えた達成感で条約事務局のみなさんもおおいにはしゃいで踊った。プロフェッショナルなタンゴダンサーも現れて、見事なタンゴを披露した。

左：夜のカクテルパーティで出されたケーキ
右：プロのダンサーによるタンゴ

●ラムサール COP12 の総参加数

6 月 9 日の正午の時点で、織内さんが事務局に問い合わせたところ、参加国 141 カ国、デレゲーション 342 名、参加人数 873 名ということだった。

プンタ・レポートはこれで終わりです。